

【2：牛娘】

赤い口紅のサキュバスを倒したレイヴンは引き続き塔の探索を続けていると、牛柄の衣装を着た淫魔が行く手に立ちはだかった。

「もー」

牛娘はおっとりした目をしていて温和そうな印象を与える顔立ちをしていた。母性を象徴するかのような丸みを帯びた乳房はあまりにも豊かで、男性を圧倒するような重量感があった。

牛娘は乳房による責めを得意とする乳魔に分類される淫魔だ。乳房を覆うV字の服の横からは脂肪が半分ほどはみ出していた。少しゆるそうに見える衣装だが、乳房は特に押さえつけなくても服に大きく食い込むくらいの重さがあった。歩くだけでもたぷんたぷんと大げさに揺れ動き、その柔らかい肉の感じを伝えてきた。

「もーもー」

牛娘は目が合うと間延びしたかわいらしい牛の鳴き声をして、軽くスキップをしながらレイヴンに接近してきた。大きな乳房が左右におおきく揺れて、見ているだけで欲情を煽られてしまう。

「私とお相手するも？」

レイヴンと牛娘は正面に向かいあうとさっそく戦いを始めた。

相手は乳魔だ。その男性をダメにしかねない乳房に手を出すのはまずい。そう思ったレイヴンは丹念にアソコ、お腹、お尻を優しく愛撫していった。

「あまりきかないもう」

しかしどうも反応がよろしくなくあまり感じてないようだった。同じ牛娘と言っても個体差はあって不感症気味なのもいる。相手を興奮させたり、気分を高めてやったりするにはどうしたらいいのかと考えていると、

「おっぱいも責めてほしいもう……」

と、牛娘におねだりをされてしまった。

淫魔全般は欲望に正直で、性感帯のことについてあまり嘘をつかないが、念のために調査の魔法を唱えて牛娘を分析すると、彼女の言葉は本当で乳房を責められるのが弱点だということが判明した。

特に胸の谷間にペニスを挟み込みすりあげる行為（パイズリ）で乳房が激しく興奮してまうという体質らしく、乳房を責めて感じさせてからじゃないと、膣やお尻など他の部位

を責められても大きな快感を受けないらしい。

「おっぱい好きにしてもう ♪」

頭の中で情報を整理しながら乳房を眺めているレイヴンに牛娘は期待の眼差しを送った。調査の魔法で調べた情報は確かなもので、今まで裏切られたことがない。まずはこの牛娘の乳房を責めて攻略する必要があった。

レイヴンは牛娘の乳房を包むV字の衣装を外側にずらすと、圧倒的な質量を有した脂肪の塊がこぼれて目の前に大きく広がり、美しいピンク色の乳首が露わになった。今からそれをどう責めるか考えるとペニスにさらなる血が集まり勃起が強くなった。

牛娘は自らの乳房への視線を感じ、興奮し硬くなったペニスを見るといやらしく目を細めた。

《選択肢》

【2 A : パイズリする】

【2 B : おっぱいを揉む】

【2 C : 乳首を舐めしゃぶる】